様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 6 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 年度～2010 年度
課題番号：２０５９２６７２
研究課題名（和文）　後期高齢者の心理社会的発達と生き方との関連

研究課題名（英文）　Relationship between psychosocial development and way of living among elderly individuals

研究代表者
服部　紀子（HATTORI NORIKO）
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号：１０３２０８４７

研究成果の概要（和文）：老年期の発達課題である自我の統合は、自分の人生を取り替え不能なものとして受け入れ、これからの生き方を見いだす力である。後期高齢期にある男性を対象に老年期の発達課題である「自我の統合」の獲得状況と、その関連要因を発達課題、生き方から明らかにした。郵送法による質問紙調査(739 人)と個別面接調査(36 人)を実施した。自我の統合の獲得に影響する要因は、これまでの人生を受け入れ、誇りをもつこと、没頭できる活動をもつこと等であった。人生の受容には他者と比較することなく自己の人生を意味づける力が必要であった。

研究成果の概要（英文）：
According to Erikson, “Integrity”, an issue in psychosocial development in old age, involves acceptance of one’s life as irreplaceable and acquisition of the ability to find ways to continue living. In the present study, we elucidated the relationships between the acquisition of “Integrity” among very elderly men and their developmental issues and ways of living. Data were collected using a mail questionnaire survey (n=739) and an individual interview survey (n=36), and analyzed quantitatively and qualitatively. The results indicated that factors related to acquisition of ego integrity included acceptance of and pride in one’s life, and having a passion. Acceptance of one’s life was influenced by the ability to find meaning in one’s life without comparing it to the lives of others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	800,000	240,000	1040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：後期高齢者・心理社会的発達・生き方・発達課題

１．研究開始当初の背景

一般的に多くの高齢者が長い老年期を獲得し、平成 18 年 10 月現在、高齢化率は過去最高の 20．8%となり、さらに後期高齢者は前期高齢者の伸びを上回る増加数で推移している。今後さらに後期高齢者が増加するなか身体的衰退を防ぐだけでなく、心理社会的発達を支える視点は、「人として意味のある老年期を生き、生を全うする」ためには欠かせない課題である。

２．研究の目的

本研究では、老年期の発達課題である自我の統合の獲得を支援するために、とくに後期高齢者の自我の統合と、その関連要因を発達課題の達成感覚、現在の生き方から探索的に明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

１）質問紙調査：後期高齢者の自我の統合性と影響要因を現在の生き方､成人期から現在に至発達課題達成状況の視点から明らかにする。

(1)調査協力者

2005 年に後期高齢者を対象に実施した初回調査で回答が得られた 739 人を対象とし、質問紙調査を実施した。

(2)調査内容（質問紙の構成）

①自我の統合の獲得状況は、Erikson の心理社会的段階目録検査(中西ら 1993、以下 EPSI と略す)を指標として用いた。Erikson によって定式化された自我の発達段階図式にたいそうした心理社会的発達課題の達成感覚を、個人がどの位意識しているかを測定評価する既存の質問紙検査である。人生の段階に沿った発達課題である信頼性、自立性、自主性、勤勉性、自我同一性、親密性、生殖性、統合性の 8 段階を質問項目とし、課題達成感覚を自己評定で回答させる。

②生き方については、生き方の方向性と具体的な発達課題を質問項目として作成した。人が目指すべき望ましい生き方について思想家、宗教家の考えを検討し、７つのタイプの生き方を類型化した 13 の生き方(Morris、C ら、1955)の陳述を活用した。他に道徳的でない生き方を 3 つ追加し 16 の生き方を示す質問項目を作成し、近い生き方を自己評定で回答させる。

発達課題はニューマンとハヴィガーストの成人期、老年期にあたる発達課題を参考に質問項目を作成し、課題達成感覚の状態を自己評定で回答を求めた。成人期の発達課題は「次世代の育成」「職業の管理」などで、老年期は「老化に伴う身体機能の変化に適応する」「自分の人生の受容」等である。それぞれの発達課題毎に質問項目を作成し、課題達成感覚を自己評定で選択させる。

③人口統計学的項目として、年齢、性別、主観的健康感、有償労働の有無、配偶者の有無等を質問した。

（３）調査方法

2009 年２月郵送留め置き法により質問紙調査を実施した。返信締め切り後、再度調査への協力依頼のための葉書を郵送した。

２）個別面接調査：後期高齢男性の心理社会的発達の達成感覚に関わる要因を現在の生き方から明らかにするため、個別の語りのなかから要因を探索し検討することを目的とした。

（１）調査協力者

2009 年質問紙調査にご協力いただいた 357 人のうち個別面接調査に承諾が得られ、かつ居住地、日程等の要件を満たし、詳細な面接内容を説明し最終的に承諾が得られた 36 人と個別面接を実施した。

（２）調査内容

調査項目は、①これまでの人生を振り返って､かけがえのないものだと思うか②もっと別の生き方があったのではないかと思うか③今現在、自分の「死」についてどのように捉えているか④今のいきがいや挑戦したいこと、逆にやり残したと思うこと⑤年齢を重ねて得たと思うこと、失ったと思うこと⑥人生のなかで大切にしているものは何か等であり、調査協力者に自由に語ってもらい必要に応じて具体的なエピソードについて質問した。

（３）調査方法

調査は、１対１の個別面接による半構成的調査法を用い、2009 年 3 月～10 月の期間で行った。面接者は３人の共同研究者が行い、被験者１人と面接した。面接場所は研究代表者の大学内のプライバシーが保持でき静かな小教室で行った。面接時間は概ね 90 分程度であった。面接内容は、許可を得て IC レコーダーに録音死、忠実に書き起こした逐語記録を分析データとした。データは重荷木下(2003)が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

４．研究成果

１）2005 年に実施した初回調査と今回 2009 年に実施した質問紙調査をもとに縦断的に後期高齢期にある男性の自我の統合の獲得状況とその関連要因を生き方から明らかにした。

（１）調査協力者の属性

75 歳以上の後期高齢者は 2005 年 339 人平均年齢 78．79 歳で、2009 年 343 人 82．65 歳であった。2005 年と 2009 年の調査結果を比

較すると主観的健康感は「まあ健康」が減少し「あまり健康でない」「健康でない」が増加したが、概ね良好な健康感であった。配偶者については「一緒に住んでいない」割合が増加したが8割は配偶者と住んでいた。有償労働をしている割合も減少しているが、2割は仕事を継続していた。経済的に満足している人の割合は増加し、8割が満足していた。

（2）「自我の統合」獲得状況

2005年、2009年ともにEPSIの回答に欠損値がない202人を対象に分析した。自我の統合の獲得状況は発達的な変化は認められなかった。維持されている状態といえる。しかし、個人差が大きくなっている傾向が認められた。生き方については、どちらかというと社会中心から個人中心的な生き方に変化し、状況に応じて柔軟に対応するといった傾向が強くなった。年齢を重ね、自分が没頭できる活動をもつことが低下していたが、没頭というよりも健康状態を考えバランス良く活動している結果ともいえる。今後、もっと自分の人生を意味のあるものにしていこうとする思いが低下していた。これは将来のことよりも現在を維持あるいは楽しく生きることに専念している姿勢の現れと推察できる。

（3）「自我の統合」と関連要因

2005年と2009年とでは、自我の統合に関連する項目に違いが認められた。重要な課題は発達的に絞り込まれて、成人期、中年期の課題達成との関連は低くなっていくと推察される。自我の統合に関連する要因は、人生を受け入れていること、人生に誇りをもっていること、自分の人生を意味あるものとして認識していることであった。生き方では、絶え間ない努力をする生き方から楽しむこと、活動すること、考えることをバランス良く含んでいる生き方、他者の役に立つ生き方が関連していた。

社会や家族を担って目標に向かって努力し続けることから解放され、ゆとりを持ったバランスの良い生き方を志向しながらも、常に人との関係で生きていることを意識し、他者へ貢献する生き方が自我の統合に関連していた。

２）後期高齢期にある男性の自我の統合の獲得状況とその関連要因を面接調査から明らかにした。

（1）調査協力者の属性

協力者は、36人で平均年齢81.4歳であった。主観的健康感は概ね健康であった。6割は配偶者と同居し、独居が3人であった。有償労働者は4割弱であった。

（2）自我の統合

①人生における獲得と喪失の観点からの分析：協力者は、強い身体、前進する心、人生の日々、大切な人々を喪失したと感じていたが、人としての賢さ・深さ・やわらかさ・誇り、人とのつながりを獲得していた。人は最期のときを迎えるまで生涯発達し続ける存在であるといえる。しかし、人生の日々を顧みて後悔し、貴重な時間を失ったと感じていることは、自己の人生を肯定的に受け入れられないことに繋がり、自我の統合に向かえない要因となる。自分の人生を重要他者と振り返り、フィードバックを得て、失敗ばかりではなく、得られた貴重なもの、人、事柄についての気づきを得る機会が少ないか無いことが起因していると推察できる。

②死に対する認識の観点からの分析：自我の統合の感覚が高い高齢者15人を対象に死の認識の分析を試みた。協力者は、何らかの慢性疾患を抱えながらも自立した生活をしており、6人は有償労働を継続していた。戦争や病気体験により自他の生命が脅かされ【命拾いした体験】や80歳を越えたという自分の年齢や同期の死に出会い【死を意識する】ことを契機に、今健康に恵まれ【生きていることを実感する】。現在の健康に生きている自分の生を振り返り、この歳まで【充分に生きられた】ため【いつ死んでも後悔はない】と思い至る。しかし、【死に方は自分では決められない】現実があり、ぼけないように、人に迷惑をかけないように【最期まで健康に生き死にたい】と願う。その願いを実現するために、人の役に立つこと、転ばないように気をつける等【生を全うするために努力し続ける】ことが語られた。加えて、身辺整理や葬儀など【自分の死に備える】行動をとっていた。後期高齢者は死を意識することで自己の生を振り返り、これまでの人生を受容し死を受け入れていた。そして、人生最後のときまで自己の生を全うするめの努力をし続ける一方、死後に備える行動もとれていた。自我の統合を支援するためには、健康な毎日を過ごしていると忘れがちであり、避けてしまいがちな死について考えることが、最期の生を生きるためには必要であることを示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計7件）

①<u>服部紀子、青木律子、中澤明美</u>：後期高齢男性の死の認識、第15回日本看護研究学会東海地方会学術集会、2011年3月19日、北里大学

②<u>青木律子、服部紀子、中澤明美</u>：後期高齢男性の主観的幸福感と生活能力との関連、第15回日本看護研究学会東海地方会学術集会、2011年3月19日、北里大学

③<u>服部紀子、青木律子、中澤明美、長田久雄</u>：後期高齢男性の自我の統合性と発達課

題達成感との関連、日本老年看護学会第 15 回学術集会、2010 年 11 月 7 日、ベイシア文化ホール
④中澤明美、服部紀子、青木律子、長田久雄：後期高齢者男性が語る統合感の様相、日本健康心理学会第 23 回大会、2010 年 9 月 11 日、江戸川大学
⑤中澤明美、服部紀子、青木律子：後期高齢者男性が語る自己の人生を受容していく過程、日本ニューマン・ケア心理学会第 12 回大会、2010 年 7 月 18 日、日本赤十字看護大学
⑥服部紀子、青木律子、中澤明美、長田久雄：後期高齢男性の心理社会的発達と健康度自己評価との関連、日本老年看護学会第 14 回学術集会、2009 年 9 月 27 日、札幌コンベンションセンター
⑦中澤明美、服部紀子、青木律子、長田久雄：後期高齢男性が語る加齢に伴う「獲得」と「喪失」、日本健康心理学会第 22 回大会、2009 年 9 月 7 日、早稲田大学国際会議場

６．研究組織

(1)研究代表者

服部 紀子（HATTORI NORIKO）
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号：10320847

(2)研究分担者

長田　久雄（OSADA HISAO）
桜美林大学・国際学研究科・教授
研究者番号：60150877

中澤　明美（NAKAZAWA AKEMI）
東都医療大学・ヒューマンケア学部・准教授
研究者番号：60413118

青木　律子（AOKI RISTUKO）
横浜市立大学・医学部・助教
研究者番号：90290048

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：